

291  
293

小山文雄著

ゆきび  
日向の  
傳説



始





持109  
926

# 説傳の向日くゆび七

著 雄 文 山 小



大正  
12. 1. 10  
子 入 美 津 の つ き 入 子  
内 交



## は し が き

私は道途傳はる處の傳説を目して、一概に架空的傳奇的なものとしてのみ葬らうとは思はない。こうした傳説も、それを通して其の土地の變遷や習俗の推移などを、臆げながら窺ひ知ることの出来る場合が少くないからである。

こうした見地に於て、私は傳説を愛し傳説を尙ぶ。そしてこうした傳説が年と共に虐げられ、一顧の價値もないものとして、滅ばされてゆくのを遺憾に思ふ。



そこで、せめて縣内の分なりと纏めて置きたいものと考へ、客秋以來これが蒐集に着手し、蒐集し得たものに、餘暇を以て、傳説の價値を損せない範圍で、脚色を施してみた。

素より私は一個の吏僚、文筆にゆかり遠く、行文必ずしも體をなさず、措辭亦穩當ならざるものあるべきを懼るゝ次第であるが、只私の小さな努力の足跡に對して、幸に御同情を賜はり、御寛恕を得ば幸甚これに過ぎない。

尙本書の公刊に際し、材料の蒐集に便宜を與へて頂いた諸彦、並に、編著につき、終始御懇篤なる御援助を辱うした東京朝日

新聞記者坂本正雄氏及び宮崎新聞記者野井憲樹氏の御厚意を謝せばならぬ。

大正十一年五月上旬

宮崎高千穂通りの寓居に於て

著者誌



みだし

美々津のつき入れ團子……………一

お金お倉ヶ濱……………二

法華嶽薬師と彌陀如來……………一〇

真帆嫌ひの權現様……………三

海の幸山の幸……………四

炎えすの野日……………五

伊福形の花笠踊……………六



愛宕大権現の御利益……………六七

権現様の御化身……………八三

狭野の仁王様……………八七

櫛の木の怪……………九一

こがねの農具……………九四

神女満壽子と榎原様……………一〇一

# 亡び行く日向の傳説

## 美々津のつき入れ團子

兒湯群の美々津港は、神武天皇御東征の御發船地として名高い處である。そして其の附近には、當時の傳説遺跡が數限りなく残つてゐる。

畏れ多い事ではあるが、天皇がお立ちの儘、衣の綻びを縫はせ給ふたと傳へらるゝ立縫ひの里や、御腰掛けの岩、御船出の前、



其處をお通りとなつて、髻をお解きになつたと傳へらるゝタブト  
 キ峠など、いづれも意味深い傳説地でないものはないが、中にも  
 美々津のつき入れ團子には、天皇にお別れを惜んだ、土民の盡き  
 せぬ情緒さへ忍ばれて、別けても思出の深いものがある。

八朔の節句、それは天皇が美々津港を御船出になつた日である  
 其の日には、美々津の町の、それも天皇の御通路であつたと傳へ  
 らるゝ、御道筋に當つてゐる家々のみであるが、此れ等の家々で  
 は、其の日に限つて、夜中から起出て團子をつくる習はしである  
 そしてその團子は、小豆と米の粉の蒸したものとを、臼にて搗き

混ぜた、頗る變なものである。

宮崎の宮居を御出發になつた天皇は、暫し此の地に御足をお停  
 めになり、從侍の者を督して、お船出の準備をお急ぎになつてゐ  
 たが、程經て、準備も全く整つたので、今は御發船の日を、お待  
 ちになつてゐる許りであつた。

頃は陰曆七月の末、陰晴定めなき空の、降るかと思へば輝り輝る  
 かと思へば曇り、時に風さへ吹き荒んでは、御船旅の殊の外御心を  
 惱まされ、雨の朝風の夕、濱邊に下り立たせられては、白波の立  
 騒ぐ沖の模様を眼を止めさせ給ひ、或時は御自ら紙鳶をお揚げに



なつて、刻々に變つてゆく風向を御覽遊ばさるゝなど、只管天候の恢復をお祈りになつてゐたが、天もいかでか、榮ゑある御征途を祝福せざるべき、數日の後、大空はカラリと霽れて微風徐ろに海面を渡り、水天一碧、海波揺がす、御船出には詭向きの好天氣となつた。

天皇はいたく御喜びになり、早速近臣をお召しになつて、明早朝を期して出船すべき旨仰出された。

ひつそりとした港の町が、急に色めき立つた。多くの人達が右往左往に馳せ廻つた。狭い港の中には、幾十の軍船が、林の様に

並んでゐた。

明日はお立ちだそうな

土人達の間には、こうしたことが次々に傳へられた。

自分達は遠からず天皇にお別れせねばならぬのだ

それは土人達もとつくに承知し覺悟してゐる事なのであつた。けれどもそれが、愈々明朝であると聞いては、又新なる惜別の情がこみあげて來るのを、どうする事も出来なかつた。

遠い海の彼方へ御旅立ちになる、そして又、いつお目に掛れるのか、それすら分らない



こう考へると、士人達は、刻々に自分達の手から、何物かを奪ひ去られてゆく様な気がしてならなかつた。そして、荒瞭たる廣原に、只獨り、ゆき暮れてゐる様な、淋しい氣分になつて、思はず涙ぐまれるのであつた。

時は刻々に移つてゆく、お別れの時が次第く々に迫つて來るのであつた。

悲んでばかりゐたつて仕様はない、せめて長い道中の御慰みに何なりとつくつて、差上げる事にしやうじやないか。

一人の男が思出した様に言つた。皆のものも無論異議はなかつた

そこで各戸から團子をつくつて差上げる事に定つた。それはもう暮近い頃であつた。

間もなく日はとつぷりと暮れた。漆を流した様な闇の中に、牛のねそべつてゐるやうな、士人達の家々では、海から吹上げて來る涼風に、ともすれば吹き消されそうなカンテラの火を中にして家族中よつてたかつて、粉をひいたり小豆を煮たりして、是非明日のお立ちに間に合せやうと急いでゐた。

士民共は、天皇のお立ちはきつと夜が明けてからだと信じてゐた。



夜の明けるのにはまだ相當間があつた。外は烏羽玉の闇で、大空には眠そうに星が瞬いてゐた。遠くの山里で、思出した様に鳴く鶏の音が、冷たい夜の空気を揺つて、松原越しに夢の様に寄せ返つてゐる波の中に消えてゆく。土民共は尙も一生懸命に團子をこしらへてゐた。どの家もまだ、戸は堅く閉してゐた。

すると間もなく、闇の中へ「起きよ〜」と叫びながら、戸毎を叩いて、足早やに過ぐる者があつた。間もなく

天皇のお立ちだ

と言ふ里人の叫びが、次から次に傳はつた。天皇は五色の七夕竹

をお持ちになり、戸毎を叩きながら、足早やに、港の方へ歩いてゐられた。

土民は、お立ちの餘りに早いのに驚いた。どの家でも、まだ團子を仕上げてゐる家はなかつた。土地の者共は周章狼狽いて餡こを中に包むひまもなく、小豆と米の粉とを搗き混ぜたものを差上げた。

これが今日、美々津の一部に傳はつてゐるつき入れ團子で、船出の日八朔の節句には、今でも御通路であつたと言はれてゐる家々では、此の團子をつくり、其の日には町の子供達は、まだうす



暗い中に起出で、七夕竹を持ち、戸毎を起きよくと叫びながら  
走せて通るのである。

そして、御通路であつたと傳へられてゐる以外の家々では、神  
罰を蒙り腹痛を起すと言ふので、決してつき入れ團子をつくるこ  
とはない。



お金お倉ヶ濱



お金お倉ヶ濱

東白杵郡岩脇村の東海岸、濱松三里、白砂遠く連つて、陸に松風の調も高く、海に千波萬波の寄せては返し返しては寄せ、千鳥浮べて鷗を乗せて、自然の歌節も面白う、昔ながらに繰り返してゐる濱邊、其の濱邊をお金お倉が濱と呼んでゐる。

青い海、凄い迄青い海、其の海の底深く、無限の蛤が棲息して居て、遠い昔から今の世迄、漁つても漁つても、漁りつづけて見



ても、つい減る模様すらない。只それだけでも、奇しき事柄であるが、それは只お倉ヶ濱だけで、同じ磯つづきのお金ヶ濱には、影さへ見せないと聞いては、尙更に不可思議な事どもである。遠い昔、濱の名さへ分つてゐなかつた頃には、お金お倉の二つの濱には、共に夥しい蛤が棲んでゐた。

今日では、潮干狩の賑ひは、お倉ヶ濱だけにこそ見られるが、其頃には、お金ヶ濱の潮干狩も、お倉ヶ濱に劣らぬ賑ひであつた。

平岩の鼻を界にして、流れ殆ど二里にも近く、細島の鼻が、ぼ

つと霞んで見える處迄、とりこんでゐる二つの濱の波打際は、まるで黒い人影で埋れてゐた。その黒い人垣が、波の間に、小さく太く揺れると、其の都度、蛤漁る人達のどよめきが、流れ幾里の汀を壓した。磯傳ひに旅する人も足を止めて打ち興じた。

其頃の事、濱邊に近いとある村に、お金と呼ぶ女が住んでゐた。生れつき大の吝嗇で、人に施す事は大の嫌いであつた。

或日の事、お金は只一人、手籠を提げて、ぶらりと濱邊に下り立つた。毎も蛤漁る人の群れ集ふ濱邊には、其日に限つて、また他に人の影は見えなかつた。



お金かねは邊あたりに人ひとのなないのを幸さいはひ、急いそいで蛤はまぐりを漁あさり廻まわつた。一つ  
又また一つ、其その都つど度、お金かねは微ほ笑えんだ。三みつ四よつ五いつつ、お金かねはもう無な  
中ちゆうで漁あさつてゐた。

すると其その處こに、行脚あんぎやう姿すがたの風體かぜなりこそ賤いやしいが、黒くろく眞まこと一文字いちもんじには  
ねた眉まゆ、底光そこひかりのする眼まなざし、引ひき縮しよつた口元くちもと、どどこかに犯をし難がたい  
氣品きひんの具そなはれる旅僧たびそう一人ひとり通とほり懸かり、側目わきめもふらず蛤はまぐりを漁あさつてゐる  
お金かねを見て、つか／＼と其その側そばに進すすみ寄より  
其その蛤はまぐりを我われれに惠めぐみ給たまはずや  
と呼よび掛かけた。

不意ふいを喰くらつたお金かねは、驚おどろいて振ふり返かへつたが、急きよに素知そしらぬ振ふ  
を装よそほひ、素早すばやく蛤はまぐりを押おし隠かくし

石いしのみなれば

と、素氣すげなく斷ことつた。

旅僧たびそうは黙もくして去さつた。

お金かねは、灯なげに沿そふて北きたへ／＼と歩あき去まる旅僧たびそうの姿すがたを、暫しばしの間あひだ  
見守みまもつて居たが、後姿うしづかたが次第しだいに遠とよざかつてゆくと、再ふたび蛤はまぐりを漁あさ  
りつづけた。

旅僧たびそうは、お金かねの無慈悲むじひな仕打しうちちに騒さわぎ立たつ胸むねを、美うつくしい濱松原はままつばら



や、鷗群れ飛ぶ沖の眺めに紛しながら、讀經口ずさみつゝ、灯傳ひに歩いてゐたが、ふと行く手に、又も女一人、頻りと蛤を漁つてゐるのが、目にとまつた。

旅僧は又もつかつかと女の方に歩き寄つた。そして、さつさお金に呼び掛けたと同様に

其の蛤を我れに恵み給はずや  
と言葉を掛けた

其の女は、ついこの濱近くに住んで居るお倉と呼ぶ者で、以前のお金とは打つて變つて氣立優しく憐み深くして、お金を野薔薇

に見立るならば、お倉は谷間の白百合にも例へたい優しい心の持主であつた。

お倉は蛤漁る手を急に止め、身形を正して旅僧に向ひ  
心易き御望み、いざとらせ給へ

と、漁り得た蛤全部をおしげもなく差し出した。

旅僧は、いかにも満足の面持で、お倉が差し出す蛤をば貫ひ受け、厚く禮を述べて、立去らうとしたが、ふと思ひ出した様に振り返り、お倉に向つて其の名を問ひ

さてもく情深き御方かな、御身の心根は必ずや天に通じ、此



の濱には未來永劫、蛤の絶ゆる事なかるべし、濱の名は御身の名を冠して、お倉ヶ濱と名付くべしとて立去つた。

お倉は無言の儘、不審な旅僧の行方を見守つた。

こうした事實があつてから、月日の小車は廻り廻つて、かれこれ四五百年もなる。そして、今日尙、お倉ヶ濱の磯傳ひに、蛤漁る人の群を見ぬ日とはないが、不思議にも蛤の減る模様すらない。

それに引きかへ、無慈悲なお金か、素氣なく旅僧を追ひ立てた

濱邊には、その事があつて以來、ふつつりと蛤が跡を絶ち、お倉ヶ濱の濱つづきでありながら、今に蛤の影すら見られない。

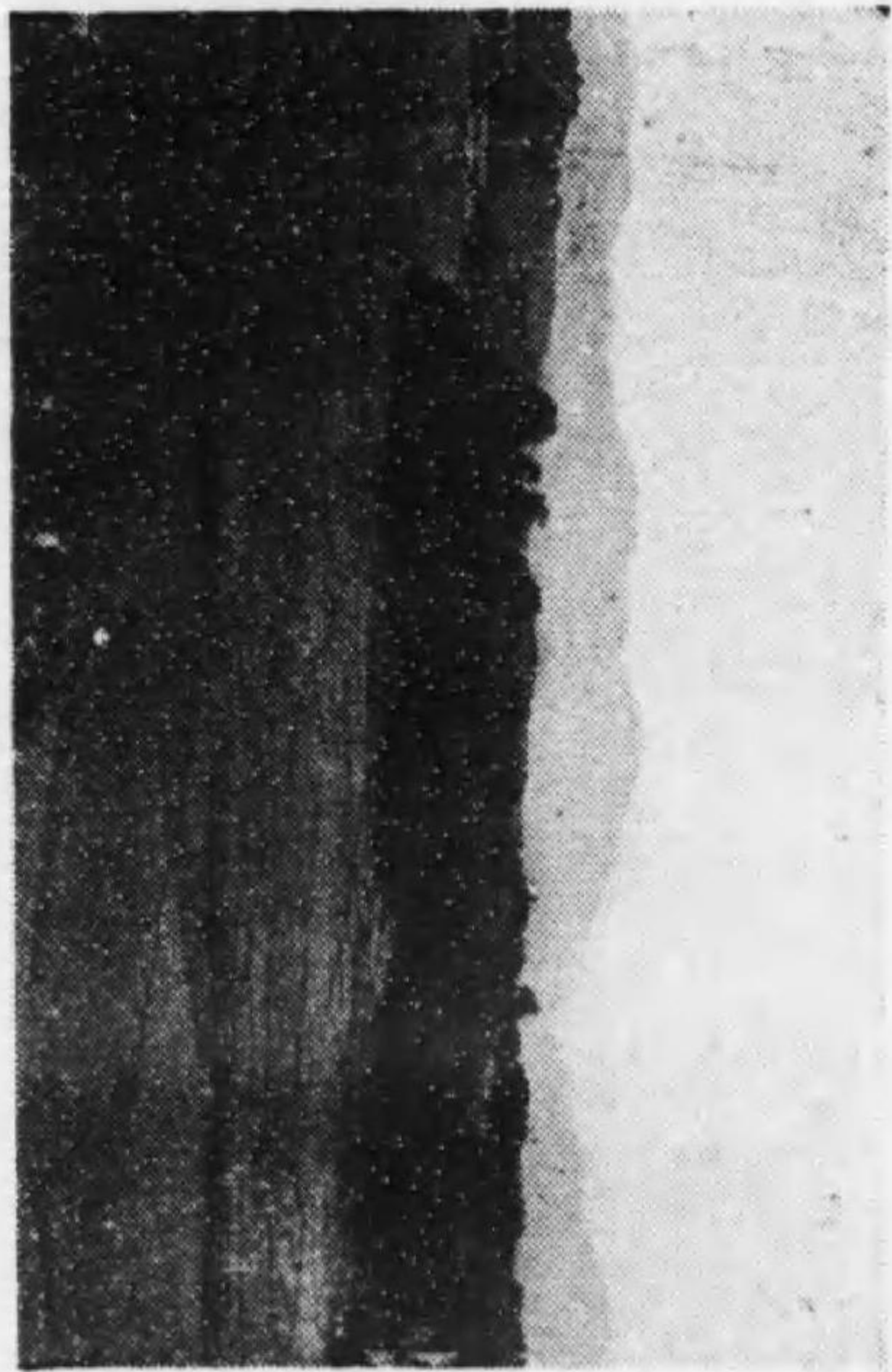
土地の人は此の濱をお金ヶ濱と呼んでゐる。



法華嶽薬師と彌陀如来

昔、東諸縣郡綾在、法華嶽の山麓に近い狩野の里に、長喜と呼ぶ男が住んでゐた。又、程遠からぬ、川中嶽の山麓狩果の里には、明久と呼ぶ男が住んでゐた。

長喜明久の二人は、どちらにも獵師で、毎日、弓矢を携へては、法華嶽川中嶽の山深く分け入つて獲物を漁り、猪や山鳥を捕つて、やうくの事で妻子を養つてゐた。



法華嶽の遠景



或る日のこと、二人は、毎もの通り、連れ立つて威勢よく獵に出掛けた。そして、あすこの谷間ここの森蔭と、終日駆け廻つて獲物を漁つたが、どうしたものか、其の日は小鳥一羽さへ射止める事は出来なかつた。二人はがつかりして歸途についた。

明くる日二人は、毎もより早く家をとび出し、今日こそと、草を分けて漁り廻つたが、其の日もとう／＼無駄に終つた。

其の明けの日も、明けの日も、とう／＼獲物は手に入らなかつた。

打ちつづく不獵に、今は糊口の途も途絶え、妻子は飢えに泣く



有様に、はたと當惑した二人は、此上は山の神様にお願ひ致し、獲物を授けて頂くより他に途はないと考へ、それ以來毎日、一心に山の幸を神様にお祈りした。けれどもどうしたものか、獲物は全くなかつた。

靈龜二年十二月八日、二人は石佛の在す釋迦ヶ嶽の奥深く分け入つて、方々獲物を漁つた揚句、毎もの通り一心に祈願を籠めてゐた。

日脚の短い冬の日は、いつの間にか山の端に落ちて、夜の幕が遠くの山から麓の村から、刻々に迫つて來た。入相告ぐる山寺の

鐘の音が、野を越え谷を越えて、風の間にくく吹き送られて來るけれども二人は、其處を立ち去らうとする氣配さへ見えなかつた。

間もなく、夜の幕は天地の一切を蔽ひつくした。遠い山里に明滅する燈火が、幽幻の國を夢みる様に哀れを誘ふ。けれども二人は身動きもしなかつた。

夜は次第に更けてゆいた。更くるにつれて、葉末を渡る山風はひどく身に凍んで來る。

二人は尙も祈願を籠めてゐたが、いつの間にか、連日の疲れに



其の儘とろくと眠りに落ちた。

葉末を渡る山風がハタと止んだ。全山の草木チラともせず、霜の置く音さへ聞かるゝ深山の眞夜中、夜寒のまゝに、二人の夢は破れた。

途端！

風もないに、バラくと木の葉の落つる音して、怪しと思ふ間もなく、二人の前に、御佛の姿立ち顯れ給ふた。

二人は喫驚して二三步飛び下がった。そして其の儘其處に平伏した。

佛は、恐れ戦く二人の者を前にして、徐ろに宣ふ様

汝等二人、殺生を業とし、明け暮れ此の深山に分け入つて禽獸を狙ひ、今日迄既に、九百九十餘宛を射止めてゐる。千に達するも後僅少である。殺生の罪眞に輕くない。

もし、殺生千に及ぶ時は、汽等神罰を蒙るは必定である。されば吾れ、汝等を憐みて、此の度の獵には獲物を授けざるものなるぞ。

されば、汝等にして若し慈悲の心あらば、只今より殺生を止めよ。さすれば其身全かるべきは勿論、子孫亦繁昌するは必然で



ある。

？吾れはこの山に住む釋迦牟尼佛なるぞ

との仰に、長喜明久は拜伏隨喜し

こは誠に有難き御教へ、我々多年獵を業とし、朝夕鳥獸を殺せども、もとより無知の徒、其の罪と作るを知らず、この上は心を改め、慈悲の限りを盡し申すべし。

只禽獸にも等しき我れ等、何卒兩人が迷ひの程を、詳しく御説き聞かせ給はる様。

と、口を揃へて申出た。佛は稍ありて容を正し

こは殊勝なる心掛け、さらば願ひの程語り聞かすべし

夫れ人間と言ふものは、窃盜、殺生、邪淫、兩舌等、惡の數を

重ぬれば、遂に天の罰免るべきに非ず。之れに引き替へ、慈悲

の心深くして、人に施し他を憐み、萬誠に生くる者は、天道の

加護を得て福德自ら授かるべし。

寺僧の道を説く、此の世に惡を重ぬる者は地獄に落ち、善を積

む者は極樂に至ると言ふも、もと是れ、凡夫を善の道に引き入

れん爲めの方便のみ、地獄と言ひ極樂と言ふも、人間五尺の體

内にこそあれ、決して他界にあるの理なし。



心誠にして善を積むこと愈々多き者の、人に敬せらるゝ事益々厚く、七珍萬寶四方より集り來りて身を樂ましむるは是れ極樂なり。

心邪にして惡を重ねる者、人に忌み嫌はれ、其の身呵責に泣くは是れ地獄なり。

汝等心を改めんとならば、此の山より東西に當つて阿彌陀藥師の尊像を安置し、來し方の罪業を拂ひ、善根を積み、行末の幸福を祈るべし。神は必ずや、汝等の罪を赦し、御惠みを垂れ給ふべし。

と御聲の終らぬ間に、早や御姿は、掻き消す如く消え失せた。

暫く御跡を伏拜んでゐた、長喜明久の二人は、只茫然として、互に目と目を見合す許りであつた。

間もなく曉告ぐる鶏の音が、遠近の村里から聞え初めた。すると、東の空がぼつと白んで、夜は次第に明け離れてゆく。

長い〜夢地から、ひよつと目醒めた様にぼんやりとしてゐた二人は、曉の空を眺めてふと我れに歸り、以後は深く殺生を慎むべきを約し、佛の御教のまゝに、長喜は東の山麓に住ひたれば、藥師如來を、明久は西の山麓に住ひたれば、阿彌陀如來を、安置



念願すべきを誓ひ、西と東に、家路を指して急いだ。

明くれば養老元年、行基菩薩偶々此の地に御立寄りの際、一本の椿を伐つて、阿彌陀如來の尊像を御成就になり、翌二年、薬師如來の尊像をも御成就になつて、安置せられたと傳へられるが、長喜明久の二人は、堅く當初の誓を守り、身を墨染の衣に包んで阿彌陀薬師の念佛に、餘生を送つたと言ふことである。

後傳教大師、此の地に御立寄りの折、長喜が心を籠めて建立せし法華嶽薬師を、長喜院と號して御堂を飾られ、明久が念願せる川中嶽如來を、明久院と開號あつて御堂を建立せられ、以て今日

に至ると傳へられてゐる。

法華嶽薬師は、寶來寺薬師、米山薬師と共に、和國一薬師の一である。そして今に至る迄、一般の尊崇誠に厚く、川中嶽如來と共に、善男善女の參詣祈願する者、四時絶ゆる事がない。



眞帆嫌ひの權現様

いつの世の事か、定かには分らぬが、兒湯郡都農町の奥、尾鈴山の中程に、松ノ木平と言ふ處があつて、そこに權現様が御鎮座になつてゐた。

松ノ木平は、尾鈴山中でもとりはげ見晴しのよい處で、脚下には都農の平野が一目の中に瞰下され、平野の盡くる處には、濱松原の並木越しに、果しもない青海原が望まれた。



眞帆嫌ひの權現様



権現様の鎮座地は、松ノ木平の中でも亦一段と眺めよい處で、  
 明け離れゆく村里の朝景色や、火灯し頃の山家の眺めなど、それ  
 は、晝にもし度い位であつた。

別けても、朝晴れの海に揺るゝ白帆や、夕陽を斜に受けた歸帆  
 の眺めは、又格別に美しかつた。

けれどもどうしたものか、権現様は、大變この白帆がお嫌ひで  
 あつた。

風もない穏かな日でも、白帆を上げた船が、権現様の真ん前と  
 覺しき邊に差掛ると、きつと顛覆した。それは全く不思議な位で



あつた。けれども漁師達は、それが、どうした理であるのか氣付かすにゐた。

今日も一ぱい覆つたと言ふせ

又かい、ひでえなあ

こんな會話が毎日く漁師達の間繰返された。

黄昏の濱邊には、運悪くも、こうした災難に逢つて、船具や漁具を流失し、命からく、濡れ鼠になつて上つて来る大の男共がついさつさの、恐しい追憶に顛へる體を、家族の者や漁師達に護られて歸つてゆくのを屢々見た。

夕暮れの漁師村に、徳利や油瓶を提げた、海人の娘達が、ひとしきり往き來して、黒い臍をむき出し、荒繩を無造作に腰の邊に巻きつけた漁師達が、のそりく、闇の中を歸つてゆく頃、カンテラの火の洩る、伏屋から、白い柩が運び出される事も再々であつた。

それは無論、船の顛覆によつて、溺れた人達の、冷たい軀であつた。

村の人達は、毎日く繰返される悲惨事に、始終おどくして暮してゐたが、こうした災難に逢ふのは、きつと帆を上げた船で



場所は毎も、権現様の真ん前と定つてゐるので、人々は間もなくこれは権現様のお怒りで、白帆をお嫌ひになるのだと氣が付いた。

それから、帆を上げた船はみんな、権現様の真ん前と覺しき邊に差掛ると、きつと帆を下して通つた。

権現様のお怒りは次第に和いだ。そしてそれ以來、船の顛覆する事はなかつた。

けれども、権現様の前を通る度毎に、帆を巻いたり上げたりするのは、随分と面倒な事柄であつた。で、漁師の人達は、内心ほ

とく、困つてゐた。

或るどんよりとした日、その日は、海面に重い黒雲が蔽い被さつて、黒く太い波のうねりが、白齒をむいて襲つて來る怪獸の様に、海濱に押寄せてゐた。

漁師達は、一人も漁には出なかつた。そしてこうした日には、どこの漁師達もがする様に、曲りくねつて濱松の下で、みんな網の手入れに餘念がなかつた。

午下りの陽が、壓くる様な黒雲の切れ間を洩れて、昏す頃には、人達の顔にはやうく倦怠の色が讀まれた。そして四方山の話が



持出された。が、話はいつか権現様の事に變つてゆいた。

なんといい方法はあるめえか

豆絞りのねり鉢巻に、毛むくの眞黒い足を、だらしなく砂の上に投げてゐた、仲間での利手らしい男が言つた。

皆の者は、一樣にその男の方に眼を注いだ、目と目がピツタリ合ふと、言合した様に、その目、その儘砂の上へ落した。鉦煙管のさきに燃え上る煙草の煙が、ゆるく地を這い廻つて、すぐ上の雲の中に溶け込んでゆく、沈黙が暫しの間續いた。

なんと白帆の見えぬ處にお變りを願はうじやねえか。

眞黒い顔の底から、白い眼の光つてゐる男が、だしぬけに言つた。

皆は期せずして頭を擡げた。そして一樣に賛意を表した。

そこでみんなして土地の選定に取掛つた。そして結局、尾鈴山麓の谷間に申下すことに意見が一致した。

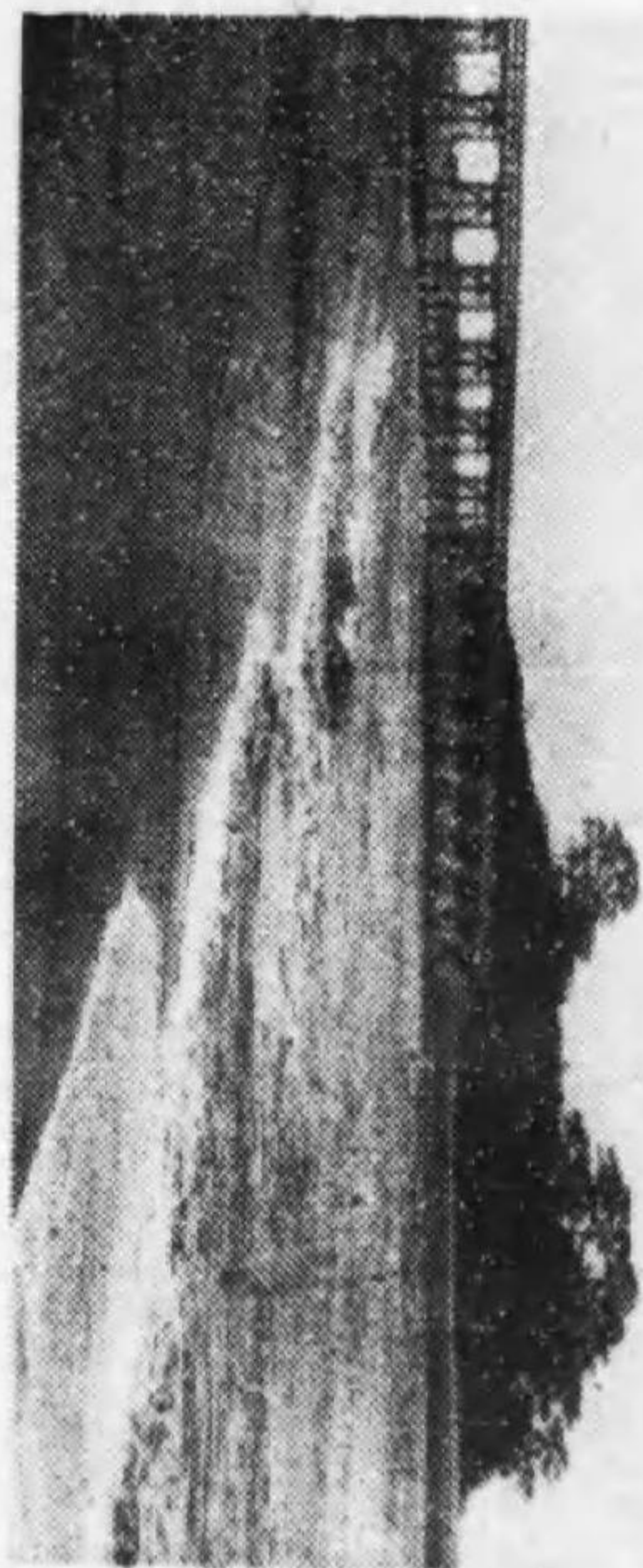
其處は以前の鎮座地に引替へ、四方山にとり圍まれ淋しい處で、落葉をくぐる谷川のせゝらぎと、木から木へ、谷から谷へ、渡つてゆく小鳥の羽ばたきの外には、何一つとして、寂莫を破るものとてもなく、無論、海も野も畑も、其の附近では見られな



つた。

けれども権現様は、其處が却つてお氣に召したのか、それ以來、都農の沖合では帆船の顛覆する事もなく、船はみな、帆を上げた儘往き來する事が出来た。

都農町を流るゝ名貫川の川上約一里半、轟の奥に淋しい山間に、鎮座ます細神社は、この白帆嫌ひの権現様で、現在の鎮座地は、漁師共が困つた揚句、申下した其の土地だと言ふ事である。



青島遠景



海の幸山の幸

天孫邇々藝の命に三人の皇子があつた。長兄を火照命、次兄を火須勢理命、末弟を火遠理命又の名を彦火々出見命と申上げた。御兄火照命は海の漁が大變お上手で、毎日、濱邊に出ては釣を垂れるのを、此上ないお楽しみになさつてゐられた。弟君の彦火々出見命は山の獵がお上手で、山野を馳け廻つては鳥獸を捕つて得意がつてゐられた。



或る日お二人の神様は、海の幸山の幸をお取換へになり、火照命は山に、彦火々出見命は海にお出掛けになつたが、どちらも不  
得手な幸なので、全く獲物はなかつたのみか、弟の命は釣針を失  
はれた。

兄の命は、山の不獵をいたく不快に思召され、早速弓矢を弟の  
命にお返しになり、御自分の釣道具を直様返す様にとお迫りにな  
つた。

餘りに性急な御催促に、はたと御當惑になつた弟の命は、釣針  
を失はれた事の由を具にお物語りになり、平謝りに謝られたが、

兄の命にはどうしてもお聽容れない。

そこで命は、御佩きになつてゐる十拳の劔をお碎きの上、多く  
の釣針をお造りになつて償はれたが、兄の命には尙も御承知にな  
らなかつた。

弟の命は更に其の倍數の釣針をお造りになり、色々とお詫びに  
なつたけれども、兄の命にはいつかなお聽容れにならず、飽く迄  
元の釣針を返す様にとお迫りになつた。

弟の命は非常にお困りになり、どうにかして、釣針を捜し當て  
たいものとお焦りになつたが、もとよりうまい考案も浮んでは來



なかつた。

或る日の事、今はせん術も盡き、且は兄の命の理不盡な御催促に困り果てられ、物思はしげに、一人とぼ／＼濱邊を徘徊つてゐられた。すると其處に、鹽筒翁が通り掛かり、命の曇るお顔を打ち眺め

何を嘆き悲み給ふぞ

と、お尋ね申した。

すると命は、ありし次第を細々とお物語りになり、今は、せん方もなく、かくは濱邊に行き暮れ居る旨お訴へなつた。

命のお物語りに、耳を傾けてゐた翁は

そは容易なることなり、よき計ひ申上ぐべし

とて、水の漏らざる籠を造つて、命を乗せまゐらせ

この籠に乗つて参せられよ、さすれば綿津見神の御殿に到らるべし、御神に姫君在し、命の爲によき計ひ仕るべし

と申し上げた。命は非常にお喜びになり、翁に厚く禮を述べ、教へらるるまゝに、籠に打ち乗つてお出掛けになつた。

命は果して美麗な宮殿にお着きになつた。そこは案の如く綿津見神の御殿であつて、御殿の門前には一つの井戸があり、井戸の



側には湯津の桂の木があつた。

命がその木に登つてお出になると、間もなく水酌みに出で来た宮女が、井の底に寫る命の姿を見い喫驚し、逃ぐる様に門内に馳せ入つて、御神の姫吾豊玉姫命に、かくとお告げ申した。

姫はさても不思議と、座を立つて表門の方へ進み出で、そつと恒間見られた。命は尙も木に攀ちてお出になつた。

姫は暫しの間、命の姿を窺つてゐられたが、みるく、姫の眼は怪しうも輝いた。胸は頻りに波立つて見えた。うら若い娘心に炎ゆる初戀の悶へが微に讀まれた。

御父君綿津見神は、姫の御心をお察しになり、命を門内にお通しになつて、厚く御款待の上、姫のお望みに委せて、御同棲をお許しになつた。

姫のお喜びは譬へ様もなかつた。そして、お二人の御仲も至極睦じく、お暮しになつてゐたが、そのお睦じい御仲に、只一つ不審に堪へないことは、命が時折り、思ひ出した様に、お鬱ぎ込みになる事であつた。

姫は、合點のゆかぬこととお考へになつてはゐたが、さりとして、始めの程は、さして、お氣にもお留めにならなかつた。



こうした間に、三年の月日が惶しく流れ去つた。その頃になると、命のお歎きは、著しく目立つて來た。そこで始めて、姫は命の素振りをお怪しみになり、其の由をそつと父神にお告げになつた。

綿津見神は、さても解せぬ事と、或る日命を側近くお召しになり、其の理をお尋ねになつた處、ここで始めて、命は、この國へお出になつた一部始終をお打開けになつた。

これをお聞きになつた綿津見神は、早速、海の魚を宮殿へお焦めになり、嚴重にお取調べになつた處、近頃鯛の喉が變で、食物

が採れないと言ふ事を、お聞込みになつたので、直様其の鯛をお呼び寄せになつて、お調べになると、案の如く釣針が掛つてゐたので、御神は大層お喜びになり、それをとつて命にお返しになつた。

命は永い間御苦心になつてゐた釣針を得て、非常に御満足になり、此の上は一刻も早く國へ歸つて兄の命にお返し致し、命のお怒りを解き度いものと、恐るゝ綿津見神へお申出になると、御神は本意ならずも、命の願ひをお聽届けになり、最も迅速に、お國へお連れ申すものはないかとお求めになつた處、一尋鰐が出て



來て、一日にお届けしようと思出たので、命は鰐の背に乗り、御神に厚く禮を述べ、宮殿を後にせられた。

命は案の如く、一日で、豊葦原の中國へ御歸着になつた。

宮崎郡青島村の海濱は、名たゝる縣南の勝境である。

右に紫波洲の廢墟が見えて、左に附女の鼻先が、白波の末に、

夢と浮ぶ、海岸は遠淺をなして、遠淺の盡くる處には青螺の様な

青島の島影一つ、島の中程からはお宮の鳥居が覗いてゐる。島と

陸とを繋いだ橋、その長橋が波上高く架せられてゐる。

島と橋とが分つた海には、唄が流れる白帆が揺れる、陸に松風がつかま琴弾けば、濱には小波が撥を合せて寄せては返へす青島は確かにお國名所の一つである。

そしてこの濱邊こそ、命が中國にお着きになつて、最初に御上陸になつた處だと言へ傳へられ、その日は陰曆十二月十七日の暮れ方であつたとの事で、今も當日は、青島神社へ參拜する者、一年を通じて尤も多い。

彦火々出見命が青島へ御歸着になつてから間もなく、豊玉姬命も背の君を慕ふて、此の地にお出になつたと言はれてゐて、天下





炎 之 野 火

の奇勝青島の島蔭深く鎮座ます青島神社には、彦火々出見命、豊  
 玉姫命、鹽筒翁が祀られてある。



## 炎えすの野火

昔百濟の國に、貞家帝し申す王様が御出になつた。  
 王様は、御年四十幾才で、御位を世嗣の福智王にお譲りになつたが、間もなく百濟の國には、非常な内亂が起つて、刻々と危険が王様の身邊に迫つて來るので、兼ねて神國と聞食され、常兼お慕ひになつてゐる大和の國に、亂を避けやうとの思召しから、數多の供奉員をお従へになり、お忍びの姿で百濟の國を後にせられた。



時は鳥度、我が孝謙天皇天平勝寶八年の御事であつた。

百濟の國を落ち延ばれた真家帝並にお供の人々は、慣れぬ御旅ではあり、殊にはお忍びの身の、木にも草にも心置かるゝ御旅なれば、憂き苦勞も一と通りではなかつたが、長途の旅も恙なく、日數を重ねて、秋も老いゆく陰曆九月の末つ方、安藝の國嚴島に御着船になつた。

紅葉染めなす島の山、小波くぐる鹿の聲、故國無趣の山川に、飽き果てゝゐられる王様には、晝にもしたく歌にもしたい内地の風光は、御旅情を慰めるに充分であつた。

帝は非常に御満足の面持で、數多の供奉員を引き従へて御上陸になり隠れ家を求めて、暫しが程は飽かぬ風光を賞でさせつゝ、平和な島の明け暮れを、御過しになつてゐたが、程經て、追手の勢が攻め来るやの噂を耳にせられたので、今は一刻も猶豫ならずとし、急ぎ旅装を整へさせ、従者を纏めて、再び筑紫路指して御發船になつた。

船は氣味悪い程静かな内海を、滑るが如く西に走つた。

人々は皆、次の瞬間に恐ろしい嵐の來るのも知らないで、海路の平安を喜び合つてゐた。



俄然、天の一角に。怪しい黒雲がむく／＼と立昇つた。人々の面上には、平安の色がサツト漲つた。

すは嵐だ!!

と言ふ間もなく、断雲は隼の様に飛んで、見る／＼内に空一面を蔽ひ盡した。今迄静かであつた海の波は猛虎の様に吠え狂ひ、雨交へた烈風は募りに募つた。

あはれ海上に漂ふ扁舟一葉、今は風前の燈にも似て帝を始め、供奉の人皆生きたる心地とともなく、あれ／＼と泣き號ぶ許りであつた。

風は愈々募り、雨は益々加つた。巨浪はいやが上にも狂ひ立ち船は手毬の様に揉まれ／＼と海上に漂つた。

幾日がの後嵐は去つた。

船は運よくも沈没を免れて、日向國臼杵郡金ヶ濱の海濱に吹きつけられてゐた。

帝を始め、船中の人達の喜びは譬へ様もなかつた。

帝は供奉員を引き伴れて御上陸になり、宮居に適當な處はあるまいかと、御索しになつた所、此の濱から西の方七八里の山奥に神門と呼ぶ小邑があつて、其の地こそ宮居に適當な處だと御聞込



みになつたので、早速同地に赴かせ、宮殿を御造營の上お住になつた。

其の後間もなく、福智王も、母君及后と共に、父君を慕ふて御入國になり、兒湯郡木城の郷比木に宮居を定めてお住居になつた。そして、それから殆ど三年の間は、故國の亂を他處に、御親子仲も睦じく、花に戯れ月に嘶き、至極平和な月日を御送りになつた。

けれども、天はいつまでも、王様達お二人の身の上に幸を與へなかつた。

百濟國の賊徒共は、貞家帝父子が、大和國に落ち延んでゐられる由聞込むや、どうとくかして討ちとらんものと、兵を練り糧を集めて準備をさく、怠りなかつたが、時はよしと見てとつた賊徒共は、天平四年の春、大舉して肥前の國唐津に押し上つた。そして貞家帝父子が、日向國神門郷に在住せらるゝと聞かや、勇を鼓して、一氣に神門郷に攻め寄せて來た。

かくと知られた貞家帝は、僅かの手兵を引率へ、坪谷伊坂山の險に據つて、極力防ぎ戦はれたが、力及ばず、御子華智王は此の一戦に敵の矢に當つて戦死を遂げられ、其他味方の死傷算なき



有様に、帝は恨を呑んで伊坂山の陣地を棄て、途中、小股吐の茅野に火を放つて、追撃し来る賊兵共々、猛火の中に包まんと謀られたが、計畫意の如く功を奏せず、とかくする中、勝に乗じた賊軍は、雪崩を打つて攻め寄つた。

王は名木に踏み止り、茲を先登と戦はれたが、勝ち誇る賊徒の勢は凄じく、貞家帝の軍は既に危しと見てとられた時も時、かくと聞かれた福智王は、石川内、中ノ股、渡川、鬼神野方面より兵を募り、手兵を合せて馳せ参じ、敵に當られたれば、さしもに猛き賊軍も、新手の勢には抗じ難く、無二無三に斬りまくられ薙ぎ

倒されて全滅し、貞家帝の軍は凱歌を奏した。

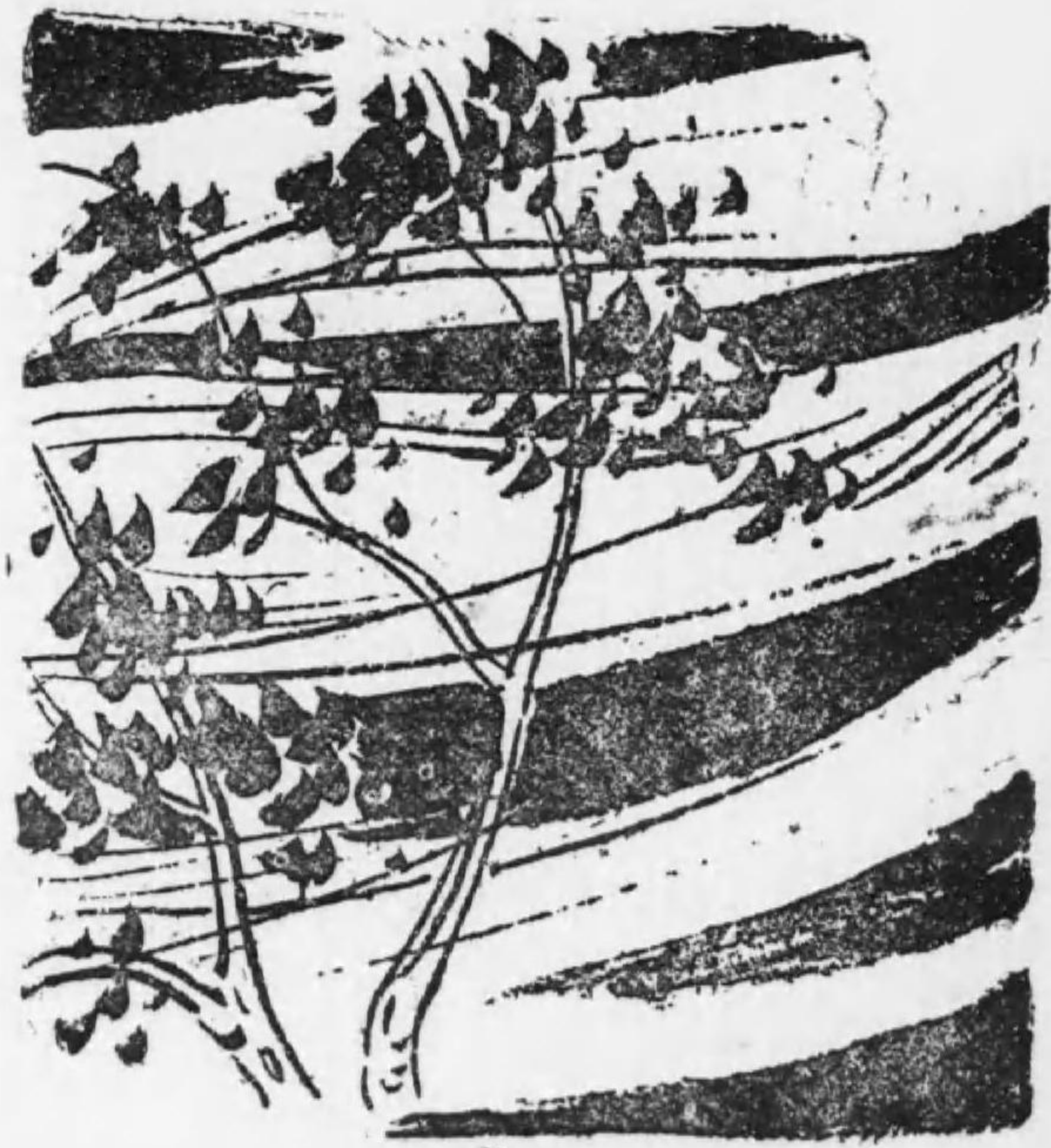
けれども帝は、此の戦に於て敵の流矢を受けさせられ、近侍の者の、心盡しの介抱も其の甲斐なく、日ならずしてお崩れになつた。

時は鳥度、葉櫻は逝く春の名残も忍ばるゝ四月の末、帝が數奇な運命は、茲に最御の幕を閉ぢた。

貞家帝最後の奮戦地である名木に於ては、今に、比木神社御神幸の際、原野に火を放つて、當時の模様を追想するのであるが、不思議にも火は、どんな強風の日でも、原野の一部に炎え盛るの



みで、それ以上いじやうに炎もえ擴ひろがることなく、或りる部分ぶぶんを燒やき盡つくせば、ひとりでに消火せうくわするとの事ことで、人皆ひとみな、世よにも不可思議ふかしぎな事ことども下あると言いひ傳つたへてゐる。



伊福形の花笠踊



### 伊福形の花笠踊

東白杵郡伊形村大字伊福形の年中行事の一つに花笠踊と言ふのが  
ある。踊子七名、優美な花笠を冠り、袴を着けて、謠と太鼓に合  
して踊るのである。

いつの世の出来事か、詳に知る由もないが、或の年のこと、  
此の地方一帯に大地震があつた。それはくは烈しい地震で、そ  
ら地震だと言ひも終らね中に、家々の柱は異様の音を立て、傾い  
た。土壁はひとたまりもなく墜ちた。灰色の空には鳥が惶しく



飛んで、森と言ふ森の木立は、一齊に葉裏を見せて、目まぐるしく揺れてゐた。人々は驚いて戸外に飛び出した。そして、今しがた森の木蔭で、のんびりと牛の啼いてゐた平和の村は、俄に鼎の湧き返へる様な騒ぎとなつた。

村の人達は恐怖の餘り、失神せんばかりで、あすこの木蔭この藪蔭と、三々五々抱き合つて顛えてゐた。

暫くの後、地震は幾らか治つた。凄い迄に青白い人々の面上にサツト紅の血潮がさしかけた。時も時、遙濱邊の方に當つて遠雷の様な響を耳にした。

人々は又しても新なる恐怖に襲はれた。

何だらう〜

こう言ひながら、顔見合して訝り合つた人々の面は再び土色に變つてゆいた。

間もなく

海嘯だ〜

と言ひ叫びが、村の端から端へ、瞬くうちに傳はつた。それと同時に、濱邊の部落からは、人々の泣き叫ぶ聲や、牛馬の悲鳴が入亂れて聞えて來た。



伊福形の部落は、再びごつた返しの騷となつた。そして、それは、以前よりももつと〜悲惨な場面を畫き出した。親を求むる子、子と呼ぶ親、老人を背負つて走る者、病者を急きたて、逃ぐる者、けたましい足音や、泣き號ぶ聲、喚く聲が、入り亂れながら瞬くうちに、裏手の山を、上へ〜と這ひ上つた。

山の様な海嘯は、家や家畜を浚ひ、田や畑を洗ひながら、恐ろしくも凄じい勢で押寄せて來た。

山上にたどりついた人達は、刻々に攻め寄せて來る海嘯を見下しながら、熱心に天に祈りを捧げた。

海嘯が村をひと呑みにするものも、數秒の後に迫つた。

小供達はあれよ〜と叫び立てた、大人達は見向きもせず祈りを續けてゐた。

間もなく一群の鷗が舞ひ下りて、寄せくる海波の上に浮ぶよと見る間に、遂今迄鋭く寄せかけてゐた海嘯は、見る間にすつと引いてしまつた。

これを見た村人は、喜びの餘り山上で踊りたつた。

伊福形の村は幸にも無難にすんだ。

土地の人達は、これは全く神の御加護だと言つて、祈願成就と



將來しやうらいの平穩へいをんを祈いのる爲ために、謠うたを作り、謠うたに合あして踊をどりを舞まつた。

これが今日こんにち伊福形いふくがたに傳つたはつてゐる花笠踊はながさをどりである。

花笠踊はながさをどりは、毎年まいねん舊七月きゅうしちがつ十六日じゅうろくにちにとり行おこなはれるが、此この日ひ、近郷近在ごうきんざいの人出ひとでは非常ひじょうなもので、道みちと言いふ道みちは全まく人ひとを以もつて埋うづめられ、淋さびしい伊福形いふくがたの部落ぶらくは、時ときならぬ賑にぎはひを呈ていするとの事ことである。

景遠の山岩愛





### 愛宕大権現の御利益

慶長の昔、秀吉の歿後、嗣子秀頼未だ幼なくして、大老家康の  
 威權、獨振ふ有様に、諸將はひどくこれを憎み、事につけ物に觸  
 れ、争は絶えなかつたが、憤ほりの發する處、遂に關ヶ原合戦の  
 幕は切つて落され、諸大名の美濃關ヶ原に馳せ向ふ者相次ぐ中に  
 宮崎郡佐土原の城主島津以久も、其の子藤九郎に留守居の役を申  
 付け、自ら手兵若干を引き率へて、家康征討の軍に馳せ參じた。  
 これを見た飢肥の城主伊東祐兵は、佐土原城の虚を突いて、一



氣にこれを攻め落し、領土の擴張を計らんものと、家臣稻津掃部に命じてこれが攻略を策せしめた。

かくと知つた掃部配下の兵者共は、日常鍛ひに鍛ひし腕、見すべき時こそ來れとばかり、劍を磨き腕を撫して、出陣の日を今や遅しと待ち構へた。

愈々出陣の日は來た。掃部が指揮下に兵者共は居並んだ。愈々出發の時が迫つたのである。

朝風に肥馬高く彼方に嘶けば、此方には朝日を受けて兵者共の劍尖が光る。赤銅の様な其の體軀、ピリともせぬ眞一文字の眉、

戦はぬに先づ敵を壓するの概がほの見える。

出發の時が來た。掃部が乗馬、其の鬣をひと揺り揺れば、進軍の命は忽にして一下した。

長蛇の如き一隊の武夫が、城門を進出するよと見る間は、歩武堂々、鐵蹄軽く、砂塵を揚げて北へくと姿を消えてゆく。

當時宮崎城には權藤氏が據つてゐた。伊東勢は先づ宮崎城を奪取すべく進み寄つた。かくと氣付いた權藤氏は、俄に兵を集めて防戦に努めたが、もとより猛り立つたる伊東勢には敵すべくもなく、瞬く内に踏み躪られた。



初陣に先づ權藤氏を屠つて、氣勢頓に揚つた伊藤勢は、息をもつがず、一氣に佐土原城へ向つて突進した。

かくと聞いた、佐土原城下の混亂は非常なものであつた。城兵の居残る者としては實に僅少で、とても伊藤勢には抗すべくもない、老幼婦女は色を失つて避難の場所を捜し求めた。

佐土原城の奥まりたる一室では、今し藤九郎を筆頭に、鬼をも挫く荒武者數名、城下の騒ぎを素知らぬ顔に、額を集めて軍議を凝らしてゐる。

或る者は眼を閉じ、或る者は腕を組み、或る者は天井を瞰へ、

或る者は腕を扼し、甲論すれば乙透さずこれを駁して、形相凄じく論じ合ふ。興奮し切つたる勇士の面上、眼は朱を注ぎ髪は立ち、殺氣室内に溢れてゐる。

けれども、僅か數十の兵を以て、敵の大軍、殊には宮崎城に先づ權藤氏を屠り、破竹の勢を以て攻め寄せて來る軍勢を、喰ひ止むべき名案は、そう容易には見付からなかつた。

藩の家老織町隼人助は、機略に富んだ才物であつた。彼れも亦其の日の評議に加つて、奇策もがなと頻りに頭を悩ましてゐたが、稍あつてハタと膝を打ち



名案の御座りまする

と口を開いた。居並ぶ者共の眼は、一齊に隼人助に集つた。別けても藤九郎は、隼人助が語を繼ぐ間ももどかしく、膝乗り出して聴耳聳て、早うくと急き立てる。

隼人助は流石に藩の重臣、佐土原方の大磐石、些も焦ら立つたる模様なく

此度の事、敵は多勢にして味方は至つて小勢なれば、所詮對戦の上にては勝算覺付なき處、然る上は敵を術策に陥れ、其の勢を挫くより外に良策とても有之まじ、就ては町内の老幼婦女を

狩り集め、これにそれく旗柄物を持たせて然るべき處に伏せしめ置き、敵の進入し來たる時、一時にとつと山上に上げ、薩藩よりの援兵なりと叫ばしめ、陣地よりは聲に應じて敵の退路を絶つべしと叶び返し、敵のたじろく處を無二無三に斬りまくつては

と申出た。藤九郎を始め、一座の面々皆隼人助の奇策に感じ入り戦略は茲に定つた。

隼人助は方略に従つて落度なく手配りした。人事は略盡された此上は天の御加護に依らねばならぬ、かく考へた隼人助は、一と



通りの準備を終へると、急に服装を改め身を淨めて、愛宕大権現に詣でた。そして

隼人助が七世の子孫を絶えるとも苦しからざる程に、是非敵を撃破せしめ給はる様

と、心からなる祈願を籠めた。

佐土原方の準備は既に整つた。今は敵の來襲を待つばかりである。

いづれ劣らぬ決死の面々、吾れこそは此一戦に、適れ武門の譽を揚げんものと、長刀引き抜き腕を撫し、敵や後しと待ちあぐみ

たる、吹かば散るべき花の身の、嵐を氣にせぬ雄々しさは、氣高くも尊い限りであつた。

やがて遙に聞ゆる陣天鼓の音、すは敵襲來と呼はわる聲に、佐土原方は弓矢をつとり長劍提げ、愛宕口に進出して待伏せた。待つ間程なく、愛宕坂上一騎、鐵蹄高く砂塵を揚ぐるよと見れば續いて二騎又三騎四騎、果ては幾十幾百の敵軍雲霞の如く押寄せ來る。

佐土原勢はこゝぞとばかり、敵軍めがけて突込めば、敵もさるもの、立所に陣容を整へて立向ふ。



砂塵天日を蓋ひ、突風颯と木の葉を巻いて過ぐる處、忽にし  
て白兵戦は現出せられた。劍端相打ち、弓箭飛び交ひ、組つ纏れ  
つ、追ひつ追はれつ、双方より起る喊聲は實に山谷をも揺がす許  
り。

合戦數刻、合しては開き開いては合し、勝敗容易に決すべくもな  
い。時も時、佐土原城のあなた、山上高く一團の黑影動くよと見  
る程に、豆より寸に、寸より尺に、次第く々に近づき來り、長旗  
高く風に揺ぐを見れば、紛ふ方なき薩摩の紋所  
薩藩の應援來る、薩藩よりの應援來る

高く低く遠く又近く、口々に叫び立つるとよめきが、城山嵐の間  
に、今し鎬を削る戦陣に達した。

すると佐土原力は一齊に聲高く

敵の退路を絶てく

と叫び返す

これ聞いた伊藤勢、たじろく様の見えければ、佐土原方は茲  
ぞと許り、勢こんで斬込んだ。

阿修羅の如く、狂ひ立つたる佐土原勢に、伊藤勢は早くも氣を  
吞まれ、軍容を亂して退き始めた。



隼人助は戦ひの始めより、必死の武者振り雄々しく、立廻つて  
 むたが、敵の後を見するや否や、敵將目掛けて追ひ追つた。

けれども彼れも必死なれば、敵も亦必死、隼人助は容易に敵に  
 追付べくもあらず、あがきはあかく折も折、天に聲あり

投げ鉾く

と、隼人助即ち手鉾おつとり發矢と投げれば、狙ひは些も誤また  
 ず、見ん事命中して、敵將はもんどりうつて打斃れた。

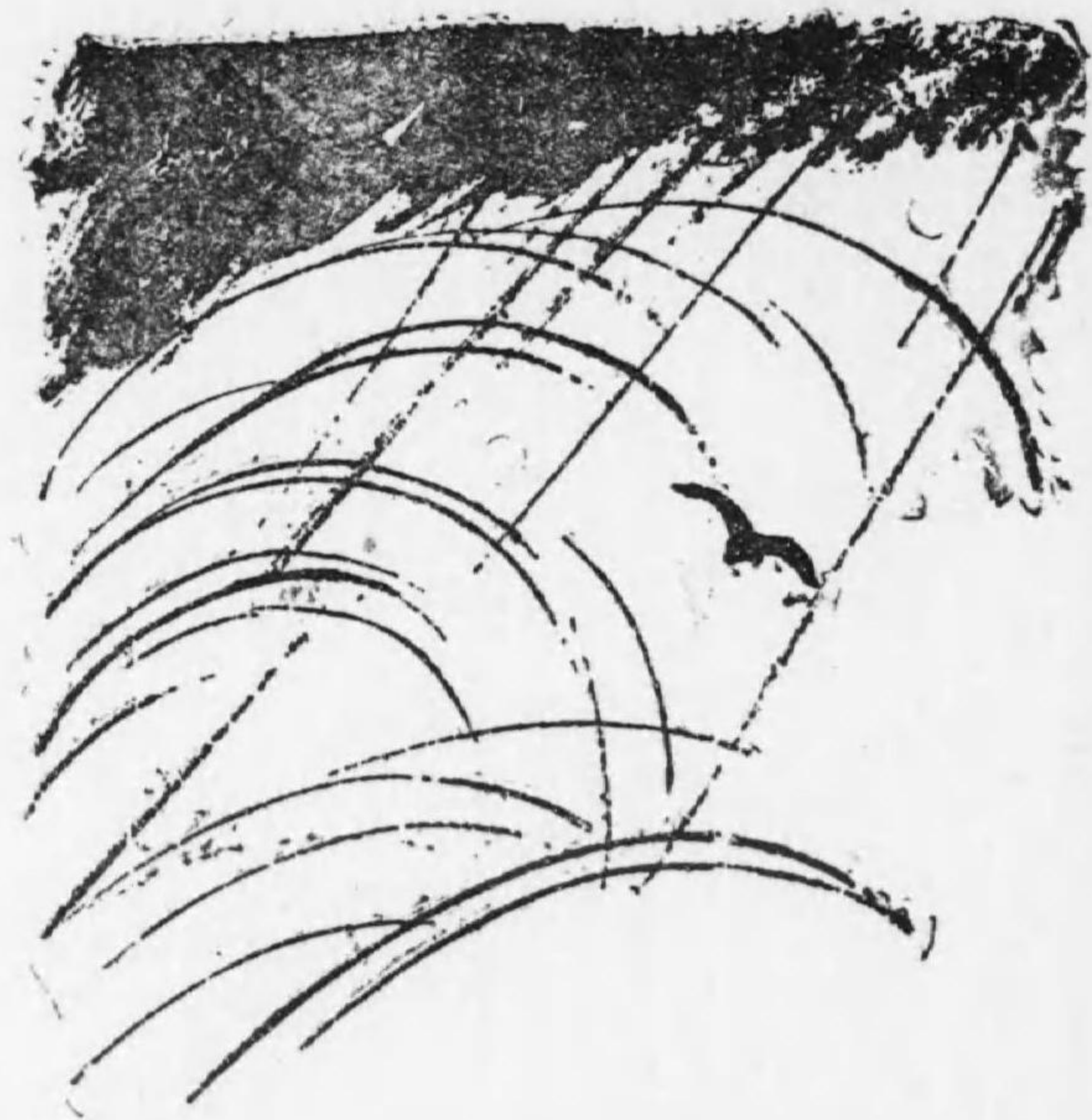
これを見た伊藤勢は士氣頓に挫け、南を指して一目散に逃げ失  
 せた。

これより前、退路に當る橋梁は、雀塚の住民の爲に破壊されて  
 ゐたれば、伊藤勢は石崎川を渡渉せんとして、稚子倉ヶ淵に溺れ  
 死する者過半、其餘は夜半残月を踏んで逃げ歸つたが、それは  
 數ふる程であつたと言はれてる。

隼人助の奇略は功を奏した、愛宕大権現の御利益は顯著であつ  
 た。

今日、愛宕山腹鬱蒼たる木の間がくれに、鎮座ます縣社愛宕神  
 社は、當時の愛宕大権現で、其の頃山上に御鎮座のものを、後世  
 現在の處へ申下したものである。そして愛宕神社は軍神として、





権現様の化身

今に里人の尊崇頗る厚いものがある。



権現様の御化身

兒湯郡下富田在王子の濱は、一つ瀬川の河口に位する太平洋岸の荒磯である。

往時、此の海濱は波浪殊に高く、海嘯の押寄する事も度々で、其の都度さ程廣くもない王子部落では、家や人畜は凌はれ、田畑は洗はるゝ有様に、土地の人達はすつかり困りぬいてゐた。

村の人達は、少しでも海が荒れ初めると、どうと加して海神のお怒りを和げたいものと、額を集めて相談したが、もとよりうま



い考案<sup>かうあん</sup>とてもなかつた。

そこで、此の上<sup>この上</sup>は、王子の濱崎<sup>はまさき</sup>に鎮座<sup>ちんざ</sup>ます、権現<sup>ごんげん</sup>様にお絶<sup>すか</sup>り申<sup>まを</sup>す外<sup>ほか</sup>に途<sup>みち</sup>はないと考<sup>かん</sup>へた。

それ以來、濱<sup>はま</sup>が荒<sup>あ</sup>れ始<sup>はじ</sup>めると、村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>達は、王子濱<sup>わうじはま</sup>の権現<sup>ごんげん</sup>様に集<sup>あつ</sup>まり、風波<sup>ふうは</sup>を鎮<sup>しづ</sup>めて頂<sup>いた</sup>ぐ様<sup>やう</sup>、心<sup>こころ</sup>を籠<sup>こ</sup>めてお祈<sup>いの</sup>りした。

その日は朝<sup>あさ</sup>から非常<sup>ひつやう</sup>な荒<sup>あ</sup>れ様<sup>やう</sup>であつた。山<sup>やま</sup>の様<sup>やう</sup>な大波<sup>おほなみ</sup>が絶<sup>た</sup>えず濱邊<sup>はまべ</sup>に押寄<sup>おしよ</sup>せてゐた。

汀<sup>なぎさ</sup>の舟<sup>ふね</sup>はみな陸<sup>りく</sup>に上<sup>あ</sup>げられて、松<sup>まつ</sup>の根元<sup>ねもと</sup>にしつかりと荒繩<sup>あらなは</sup>でいはへられ、恐<sup>おそ</sup>ろしい嵐<sup>あらし</sup>の前<sup>まへ</sup>を思<sup>おも</sup>はしてゐた。

王子<sup>わうじ</sup>の濱崎<sup>はまさき</sup>には、いつもの通<sup>とほ</sup>り、村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>達が全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>集<sup>あつ</sup>つて、権現<sup>ごんげん</sup>様に祈願<sup>きぐわん</sup>を籠<sup>こ</sup>めてゐた。

海<sup>うみ</sup>は刻<sup>こく</sup>々に荒<sup>あ</sup>れ狂<sup>くる</sup>つた。風<sup>かぜ</sup>はいよ／＼吹<sup>ふ</sup>き募<sup>つ</sup>つた。

村人<sup>むらびと</sup>の祈願<sup>きぐわん</sup>は尙<sup>たほ</sup>もつづけられてゐた。

すると間<sup>ま</sup>もなく、純白<sup>じゆんぱく</sup>な一羽<sup>いちは</sup>の小鳥<sup>こどり</sup>が、ごここからともなく飛<sup>と</sup>んで來<sup>き</sup>て、濱邊<sup>はまべ</sup>に舞<sup>ま</sup>ひ下<sup>お</sup>りた。

と見る間<sup>ま</sup>に其<sup>そ</sup>の小鳥<sup>こどり</sup>は、双<sup>そう</sup>の翼<sup>つばさ</sup>をバツと擴<sup>ひろ</sup>げて、荒<sup>あ</sup>れ狂<sup>くる</sup>ふ海<sup>かい</sup>波<sup>は</sup>を蹴<sup>け</sup>つて、縦横<sup>じゆうわう</sup>無<sup>む</sup>盡<sup>じん</sup>に翔<sup>か</sup>け廻<sup>まわ</sup>つた。すると今迄<sup>いままで</sup>、荒<sup>あ</sup>れに荒<sup>あ</sup>れてゐた海<sup>うみ</sup>は、油<sup>あぶら</sup>を流<sup>なが</sup>した春<sup>はる</sup>の海<sup>うみ</sup>の様<sup>やう</sup>に、瞬<sup>また</sup>く内<sup>うち</sup>に平<sup>へい</sup>静<sup>せい</sup>に歸<sup>き</sup>した。



それ以來、王子の濱には、絶えて海嘯の襲ひ來る事なく、人々は皆、權現様の御利益を稱へあつた。そして、其の一羽の小鳥こそは、權現様の御化身であつたのだと今に言ひ傳へてゐる。

王子權現は後に、下富田神社となつたのであるが、附近の人達は、今に權現神社と呼び、靈顯殊に著しいとの事で、御祈願をする者が誠に多い。



狭野の仁王様



## 狭野の仁王様

西諸縣郡高原村狭野の里は、東霧島山麓の一小部落で、名高い狭野神社の鎮座地である。

風變りな神社の一の鳥居をくぐつて、天を摩す狭野杉の茂みに  
 こんもりとして射す日の光さへ力ない、爪先上りの參拜道を通り  
 抜け、ひよつと明るみへ出ると、すぐ其處に、雲を突く様な仁王  
 様が、行く手を遮るかの様に、突立つてゐられるのに膽王を潰さ  
 れる。



今は昔、此の附近に神徳院と云ふお寺があつた。當時仁王様はそのお寺においでになつた。其頃狭野の里は、毎年毎年大豆の豊作が續いた。

いつの頃にか神徳院は廢寺となつた。そして住む人もない山寺は、年と共に荒れ果てて、屋根は落ち柱は朽ち、底の芒の蔭では狐が泣いたりした。

仁王様もお寺が荒れると、誰れ顧みる者もなく、谷間に打ち倒された儘幾年かが過ぎた。

其頃になると、豊作つづきの狭野の大豆は、年毎に非常な不作

で、土地の人々は少からず困つた。

すると、誰れ言ふとなく、これは神徳院の仁王様がお疎末になつてゐるせいだと言ひ出した。

こんなことが言ひ觸らされると、村の人達は口々に言つた。

仁王様は南洋から御渡來の際、大豆を持つておいでになつた方だと言ふせ

そうだらうそれに違ひない

これを聞いた氣の早い男は又言つた。

一時も早く何處かへ運んでお据ゑ申そうじやないか



それがいい〜

皆みなの者ものは一いちも二にもなく賛成さんせいした。

そこで部落ぶらくの人達ひとたちは、力ちからを併あはせて谷間たにまの仁王様にわうさまを抱いだき起おこし、現げん在ざいの所ところ迄まで擔かつぎ上あげてお据すゑ申まをした。

すると不作ふさくであつた大豆だいづは、其その年としから以い前ぜんの様やうに豊作ほうさくとなつた。

此この地方ちほうでは、今いまに仁王様にわうさまは大豆だいづの神様かみさまだと言いひ傳つたへてゐる。



怪 の 木 の 楯



## 楮の木の怪

東諸縣郡綾村の森山は、其の名の様に、こんもりとした淋しい森である。其の森の中に、年老いた楮の木只一本、亭々として半空に聳え立つてゐる。下には小祠二つ、馬頭観音と弘法大師が祭られてゐる。

大むかし、此の地方が海濱であつた頃には、今でこそ木遣りの聲絶えぬ綾の奥にも、男波女波が立騒いで、出つ入りつ、港の朝夕の賑ひが、此處でも見られるのであつた。



其の頃のこと、出入の船を繋ぐ爲に、渚近くに櫛の杭木を立てた者があつた。すると不思議にも日ならずして其の杭木から新芽をふいた。變だと思つてゐる間に枝が出来て葉がついた。そしてぐんぐん成長してゆいた。

これが今日、森山に残つてゐるあの櫛の木で、數千年後の今日迄、枯れることがないのだと言ひ傳へられてゐる。

そして、尙も不思議な事には、此の木の落葉や枯枝を拾つて薪とすれば、即座に神罰を蒙つて腹痛を起すとの事で、今尙、誰れ一人として拾ひ取らうとする者もなく、細やかな枯枝の末迄、附

近信者の手に依つて、老木の根元に積重ねられてゐる。



## こがねの農具

東白杵郡西郷村田代在の、粕野と言ふ村に、昔、橋本大隅の守と呼ぶ神官が住んでゐた。

粕野は、権現山の麓近くの淋しい村で、村人の多くは、あり餘る田畑を耕して渡世してゐた。

その多くの田の中に、村の人達が、三隅田と呼んでゐる一坪足らずの田があつた。

不思議な事には、夜になると、どこからともなく、此の田に



こがねの農具



疋の犬が来て、けたたましい聲で吠え立てた。

村の人達は、薄氣味悪い事に思つてはゐたが、誰一人として、見定め様とするものはゐなかつた。

餘りの事に大隅の守は、或る夜、家を脱け出して、三隅田の方へ窺ひ寄つた。其處には矢張り一匹の犬がゐて、毎もの通り吠え立てた。

大隅の守は尙も忍び足で近よつた。そして、そつと犬の吠え立てる方向に眼を配つた。

と、権現山の頂とおぼしき邊に怪しい光を認めた。



大隅の守は身震ひした。そして逃げる様にして我が家へ歸つたが、恐いものは見たかつた。

明くる日大隅の守は、附近に住む獵師の親分の、九兵衛爺さんを道案内に頼んで、山を分け登り、こゝかしこと捜し廻つた。方々捜しあぐんだ末、山の頂で不思議な農具が見付かつた。それは黄金で造られて、霧島六社大権現の文字も顯はに彫りつけられてゐた。

これだ！

大隅の守は思はず叫んだ。そして且つ喜び且つ恐れ、其の場所に

細やかな祠を建てて移し奉り、お祭を怠らなかつた。

岩脇村お金ヶ濱は、田代から九里餘りも隔たつてゐる大平洋岸の荒磯である。磯馴松青く砂白く、怒濤奔馬と狂ふ有様は、又格別の眺である。

當時お金ヶ濱の磯傳ひに、旅する人も少くなかつたが、どうしたものか、白馬に跨つて此の地を通ると、きつと蹴落されるので人皆、霧島六社大権現の神罰を蒙るのだと囁き合つた。

そこで、頂上の祠を山の中程迄申下して、尙もお祭りを怠らなかつた。



それ以後、お金ヶ濱の磯傳ひに、白馬の害を被る者はなくなつたが、御神體の黄金の農具は、いつの間にか御鏡に變つてゐた。露島六社大権現は、後に田代神社と改稱せられた。そして、御鏡は今も田代神社の御神體となつてゐる。

田代神社の例祭は師走の二十八日である。例祭には盛んな神幸が近在の部落を練つて歩く。そして神輿の前驅は、今も九兵衛爺さんの子孫がこれに當り、神輿が御堂の坂に差しかゝると、九兵衛爺さんの子孫は、三度聲を立て、権現神社を呼び迎ふる例になつてゐる。

三隅田は他の神田と共に、今も田代神社の宮田となつてゐて、毎年七月七日には、宮田植の儀がとり行はれる。この日牛馬數十頭、壯夫鞭を鳴し聲を發すれば、一齊に泥田を蹴つて耕し、終れば男文競ふて苗を植ゑる。此間、神職は列を正し鼓を撃つて神歌を歌ふのである。

寺の迫なる古井には、清泉が湧いてゐる。宮女は其の日、此の水を酌んで飯を炊き、飯櫃を頭上に戴いて神饌を配つてある。其の風は遙に古を偲ばせるものがある。

宮田より收穫せる米は、神饌とするのであるが、此の日近郷近



在ざいの男女なんによまたぐいさ亦また群賽ぐんさいし、時ときならぬ雑沓ざつたふを極きはめるとの事ことである。



社 神 原 榎



神女満壽子と榎原様

元和の昔、南那河郡串間の郷に、内田外記と呼ぶ侍が住んでゐた。治に居ては武士の家の、とりたてて爲す事もなく、さりとして衣食には事缺かねば、悠悠自適、時あつては歌俳偕に思ひをやりながら、片山里の明け暮れを妻と淋しくも過してゐた。

こうした淋しみの内にも、月日はとめどもなう流れくくして幾年かが過ぎた。

元和六年の某月某日、外記は家は蘇つた様な歡びに充ちた。



常闇の國から急に明るい國へ出たかの様に、二人の心には一様に明るい影がさしそなた。

常日頃火の消えた様な外記の家からは、華やかな笑聲が洩れたりした。

一子満壽子が産聲を揚げたのであつた。

食うに不自由なく、衣るに心を勞せぬ迄も、子のない誰れしもが經驗する淡い淋しみは、等しく外記夫婦とても感せぬ譯にはゆかなかつた。

### 一子満壽子の出生

それは、落葉の森深く徘徊つてゐる様な心の主、外記夫婦を、突然、百花亂れ咲く春の野に誘つた様なものであつた。

夫婦は天の與へと打ち喜び、はぐくみいたはつて成長の日を待ち侘びた。

這へば立て、立てば歩めの親心に絆されて、満壽子は日一日と成長した。

花が開いて凋んで散つて、山の木の葉が黄ばんで落ちて、落ちた木の葉を木枯がちよいく巻いて過ぐると、又春に復つて秋が巡つて来る。



満壽子を得た外記の家は、錦上花を添へた喜びの内に、三年の月日が夢と流れ去つた。

満壽子もとつて三つのいたいけ盛り、夫婦の愛は日増しに、満壽子の上に鍾つてゆくのであつた。

その年仔細あつた外記夫婦は、串間の郷からさ程遠くもない、榎原の地に移住することになつた。満壽子も無論伴はれた。

榎原に移つてからも、外記夫婦は平和な月日を送り迎へた。満壽子は夫婦の愛を身一つに鍾めて日増しに大人びた。

春の花、秋の紅葉、幾度か外記の家を訪れては、いつの間にか

満壽子の髪は艶々しいお下げになり、いつの間にやら銀杏返しに變つて、落つる木の葉にさへはにかまるゝ十六七も夢と過ぎ、早くも女盛りの十九の春が満壽子の上にも廻つて來た。

雨にうたるゝ海棠の淋しみはなくとも、星の瞬く廣野の果てにうなだるゝ月見草の憐れはなくも、どこかに潤みを持つた眼ざし漆黒な髪、豊艶な肉付、口數少なに舉措しとやかな満壽子の姿はいつしか村人の口の端に上つて、行き交ふ人が振返へつて見たりした。

好い子じやないか。



村の人達はこういつて頻りとほめちぎつた。

こうした噂を聞込む毎に、外記夫婦は強い誇りを感じるのであつた。そして其の誇りは、やがて満壽子に對する強烈な情愛に變つてゆいた。

けれども福の裏には禍が潜む、月も満ちては缺けずには濟まぬ運命の神は、早くも其の冷たい魔の手を外記の家に差向けてゐるのであつた。

年の陰曆九月の中ば、裏山を染め抜く紅葉が落日に映えて、泣き細りゆく蟲の音に、秋の哀れのいとど身に泌む夕べ

内田の満壽子さんは氣が狂つたそうだ

九月九日鴉戸様へお籠りしての歸るさ、突然發狂して、とりどめもない事を口走るそうだ

こうした噂がバツト擴がつた

まああの人一倍おとなしい満壽子さんが狐つきだらう

村の人達は、寄るとさばると、こういつて怪訝そうに眼を瞠つた。

満壽子は狂つた。眞實狂つたのだ



振り亂した黒髪、爛々として人を射る眼光、尋常一様でないことは直ぐと領かれた。

娘盛り満壽子の身の上に振りかゝつたこうした災難は、直ぐと平和な外記の家に暗い影を投げかけた。

満壽子に對する夫婦の愛が深かつたゞけそれだけ、夫婦の驚きと悲しみとは大きかつた。

どうかして正氣に復さねばならぬ、復してやりたい、それは眞實心の奥底深く流るゝ親の情であつた。

夫婦は神様に願もたてた、佛様を念じても見つた、けれども、ど

れ程の驗めもなかつたのみか、狂態は日増しに募る許りであつた。

秋がだん／＼老いゆいて、庭の公孫樹の葉が、可愛らしい扇を飛ばせる様に舞ひ落ちる。

するとその葉を下の小川が受けて、凋落の歌を歌ひながら流れてゆく。つい對い合せの、半ば坊主になつた大木の頭に、鳥がしよんぼり泊つて泣き暮す頃になると、満壽子の身のまわりには、なにかと解し兼ねる事が増してゆいた。

夕闇の迫つてくる庭先に、空を見詰めて突立つたゐるかと思ふ



と、急に、風もないのに庭の木立がざわ／＼揺れて、突然黒雲が外記の家を包んだりした。そればかり、暫くすると、今し庭の面に茫然として佇んでゐた満壽子が、其の黒雲の中に、天女の姿で立現はれ、驚く兩親を尻目に掛け、何事か手振り怪しう合圖をすれば、黒雲は満壽子に乗せたまゝ、隼の様に空高く北に飛び去つた。

ものの小一時間も経つと、黒雲は満壽子に乗せて歸つて來た。と見る／＼黒雲は消え失せて、美しい天女姿の満壽子は、いつの間にか、行燈の火影の揺ぐ奥の一と間に、毎もの姿で座つてゐ

た。

こうした事が幾度か續いた。其の都度、満壽子は鶺鴒様にお詣りしたのだと言つて、鶺鴒の濱砂を持つて歸つた。

村の人達はもう、満壽子の名を聞いてさへ顫え上つた。道ゆく人も外記の門前はわざと避けて通つた。

満壽子の身のまはりに起る、こうした不可思議な出來事が募るだけ、外記夫婦の心痛は増してゆいた。

どうと加して正氣に復さねばならぬ、こうした考へは、つい夫婦の念頭から去る時はなかつた。



或る日のこと、秋の陽を浴びながら、南向きの緑先に、つくねんとしてゐた外記は、思ひ當ることのあつてかハタと膝を打ち、つと立つて其の儘家を出てゆいた。

黙々として歩いてゆく外記の後姿は、間もなく野道に細つてゆく。

野道が儘くると、小松原をチラ／＼通り抜けて、松原つづきの山の麓をくる／＼廻つて、其の先きにちよんぼり赤く見える山門の中に、吸ひ込まれる様に姿は消えてゆいた。

程經て外記は、僧の精能を伴つて歸つて來た。

狐つきだ變化の仕業だ、こう信じきつてゐる外記は、魔拂ひの祈禱をして貰ふつもりだと分つた。

精能は満壽子の部屋に通された。そして讀經怪しく魔拂ひの祈禱を始めた。

すると不思議にも、今が今迄、とりとめもない事を口走つてゐた満壽子は、急に容を改め、精能の前に進み出で

妾は鶺鴒様の神氣懸りて通を得たるもの、妖怪變化の仕業などとは思ひもよらず、魔拂ひの御祈禱とあらば何卒およし下ださる様



と、言葉知らに申出た。

其の態度、其の言葉使ひ、狂氣じみても見えざるに、僧の精能は小首を傾け

神通力を得られしとな、然らば御身に問ひ糺すべきことこそあれ

と酬ゆれば

いざなになりと問はせ給へ

と言下に答ふ

僧の精能は然らばとて、心に浮ぶ事、順序もなく問ひ掛くるに

問ひに應じて満壽子の答ふる所、一として誤りなく寸分の相違すらない。

外記夫婦は顔見合せた。精能も驚嘆した。そして傍らの外記を顧み、世にも珍らしき神女の出現ぞと呟いて立去つた。

それ以來、狂女満壽子の名は、神女満壽子として里人に驚嘆の眼を以て迎へられ、吉凶禍福の判断を乞ふ者が門前に市をなした。

満壽子の狂態はすつかり止んだ。夫婦を包んだ愁雲は次第にうすれてゆいた。そして再び歡樂の世界が擴がつてゆいた。



神女満壽子の名は、いつの時の飢肥城主伊東祐久の耳にもはいつた。

祐久は、世にも不思議の事もあるものかと、家臣を遣して見せしめ様とした。

藩臣矢野仁左工門は、音に聞えた朱子學者であつた。これを見て藩主を諫めて言へる様。

世に左様の道理あるべからず。かゝる奇言をなす者は、世の秩序をば紊るもの、斬首に處せらるゝこそ至當なれと、されども藩主容かず、人を派して見せしむるに、噂に違はず

言ふ處的確、一言一句驚嘆に値せぬものはない。

使の者の辭し去らんとする時、満壽子は水莖の跡も美はに、左の三首の歌を認めて藩主に贈くつた。

赤白の二色のいろを知らされは天道よりの矢こそ當らめ

白露の己が心をそのまゝにもみちにおけは紅の玉

絹小袖いかなる幹日にたちにけんきる度毎にあわぬつまかも

それ以來、藩主の満壽子を信すること頗る厚く、凡慮の及ばない事は、きつと満壽子に問ふて事を運んだ。

越へて明暦二年、藩主祐久は、自ら満壽子を訪れたが、其の際



満壽子が言ふ様には

鶺鴒神宮は、天照太神以下神武天皇に至る、六代の大神を祀る世にも有難い神社にして、かくも尊い神社を、藩内に有せらる御身の幸福はこの上もない。只に御身の幸福に止まらず、御家門の榮譽とも申すべきもの、さればこれを東西に祀り、御家國の鎮守として厚く奉齊せらるべし。

祐久は實にもと打ち領き、早速榎原の地に工を起して、萬治元年鶺鴒神宮の御分靈を奉して榎原神社を鎮祭し、飫肥の御兩社と

稱へて、尊崇他に超ゆるものがあつた。

縣南榎原の地に、千木高く鎮座ます榎原神社は即ちこれである。そして今に至る迄、榎原神社は鶺鴒神宮と共に、西國著名の神社として、縣南を過ぐる者、この兩社に詣でないものはない。

寛文十年三月の十六日、うすら寒い春風が、袂を颯つては過ぐる夕、天の一角に飛ぶ隕石の様に、神女満壽子は五十一才を一期として忽焉として去つた。

けれども神女満壽子の名は、榎原の神垣の榮えゆくまゝに、永



く語り傳へられて消ゆることはない。

そして、榎原神社の境内に祀らるゝ、小祠櫻井神社こそは、神女満壽子の靈魂が永久に眠つてゐる處なのである。

大正十一年十二月二十日印  
大正十二年一月一日發行

定價金八拾錢

不許  
七び  
日向の傳説  
ゆく  
複製

宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上別府九百二十一番地  
著者 小 山 文 雄  
發行者  
東京市牛込區市谷町一丁目十六番地  
印刷者 宮 城 伊 兵 衛

發行所

東京市牛込區市谷町一丁目十六番地

國氏 教育良書刊行會  
振替東京七六七四番 電番町六九六番



|     |
|-----|
| 291 |
|     |
| 293 |



終

